

福 祉

1 研究のテーマ

(1) 研究テーマ

I C T機器及び生成A I を活用したグループ活動の可視化による個人評価の工夫 ー指導と評価の一体化を目指してー

(2) 研究のねらい

本研究では、①グループ活動における個人の学習を公平かつ適切に評価する個人評価法を考案し、②即時的なフィードバックと自己評価を授業に内在化して生徒の自己調整の循環を生み出すことを通して、指導と評価の一体化を実現することを目的とした。

2 実践事例

(1) 単元の指導と評価の計画

ア 科目名：「コミュニケーション技術」

イ 単元名：福祉実践におけるチームのコミュニケーション

ウ 単元の目標：

- (ア) 福祉実践におけるチームのコミュニケーションとして情報の共有化や連携などについて理解するとともに、関連する技術を身に付けること。
- (イ) 福祉実践におけるチームのコミュニケーションについての課題を発見し、職業人に求められる倫理観を踏まえ科学的な根拠に基づいて創造的に解決すること。
- (ウ) 福祉実践における情報の共有化や多職種協働の重要性について自ら学び、主体的かつ協働的に取り組むこと。

エ 単元の評価規準

| 知識・技術 | 思考・判断・表現 | 主体的に学習に取り組む態度 |
|---|---|---|
| 福祉実践におけるチームのコミュニケーションとして情報の共有化や連携などについて理解するとともに、関連する技術を身に付けている。 | 福祉実践におけるチームのコミュニケーションについての課題を発見し、職業人に求められる倫理観を踏まえ科学的な根拠に基づいて創造的に解決している。 | 福祉実践における情報の共有化や多職種協働の重要性について自ら学び、主体的かつ協働的に取り組もうとしている。 |

オ 単元の指導と評価の計画 ○「記録に残す評価」 ●「指導に生かす評価」

| 次 | 時 | 学習活動 | 評価の観点 | | | 評価のポイント・指導上のポイント |
|---|-------------|--|-------|---|---|---|
| | | | 知 | 思 | 態 | |
| | | 【単元を貫く問い】 “ただ伝える” から “伝わる” 共有とはどういうものか？ | | | | |
| 1 | 1 ・ 2 | 【記録の意義と目的】 介護における記録の意義や目的、重要性について学び、介護記録の活用について考察する。 | ● | | ● | 【指導上のポイント】 (知) 介護記録の重要性と記録の役割、機能について理解し、適切に表現している。 (態) 記録の活用について見通しをもって主体的に学ぼうとしている。 |
| | 3 ・ 4 | 【記録の種類】 介護に関する記録の種類と内容について考察する。 | ○ | | | 【評価のポイント】 (知) 記録の種類と内容について理解し、適切に表現している。 (技) マッピング技法を身に付けている。 |
| | 5 | 【記録の方法と管理①】 記録の方法や個人情報の保護、記録の管理についてワークシートを用いて学習する。 | ○ | | | 【評価のポイント】 (知) 5 W 1 Hを用いて事実を整理して記録している。 |

| | | | | |
|---------|---|--|--|--|
| 6 本時 | 【記録の方法と管理②】 役割ごとの聞き取り・グループ内での口頭報告による演習を実施する。その内容を生成AIを用いて文字起こし・分析し、客観的なフィードバックを受ける。これらを通して、事実と推察を区別した根拠に基づく報告のあり方を考察し、自身の表現を振り返る。 | | | 【評価のポイント】 (思) チーム内で齟齬なく情報を共有するため、5W1Hを用いて情報を整理し、事実を時系列や因果関係に基づき、論理的に構成できる。 (思) 多職種連携の場面を想定し、膨大な聞き取り内容から、共有すべき優先順位の高い情報を適切に判断できる。 (思) 科学的根拠に基づいたチーム意思決定を支えるため、主観(推察)と客観的事実を峻別して報告内容を組み立てることができる。 (態) 相互学習やフィードバックを生かして記録・報告の表現を粘り強く改善しようとしている。 |
| | 【情報の共有化】 情報の共有化の意義と目的を学び、正しい情報共有の方法について考察する。 | | | 【評価のポイント】 (思) 情報の共有化に関する諸課題を発見し、創造的に解決している。 (態) 情報の共有化を行う際の留意点について主体的に考察している。 |
| 2 | 【チームのコミュニケーション】 介護におけるチームのコミュニケーションの意義と留意点について事例を通して、考察する。 | | | 【評価のポイント】 (思) チームのコミュニケーションに関する諸課題を発見し、創造的に解決している。 |
| | 【会議】 会議の目的と方法、種類について学び、よい会議にするためのルールや会議の持ち方について考察する。 | | | 【評価のポイント】 (知) 会議の目的と方法について理解している。 |

カ 授業実践例 (6時間目/9時間)

<本時のねらい>

- ・5W1Hを手がかりに報告に必要な情報を的確に選び、事実と推察を区別して根拠を明確にした記録・報告の構成を考察する。相互学習やフィードバックを通して粘り強く表現を改善しようとする態度を育む。

<本時の流れ>

| 学習活動(指導上の留意点を含む) | 評価の観点(評価方法) |
|---|-------------|
| 1 導入(10分) ○挨拶、出欠確認 ○4人組グループ内の役割(A~D)の確認 (A:近所の住民、B:民生委員、 C:息子の古い友人、D:当事者のかかりつけ医) 【指導上の留意点】 ・前時に4人組グループを組織し、役割の伝達を済ませているため、本時は、前時の4人グループの座席で着席させる。 ○本時プリントの受取 【指導上の留意点】 ・生徒配付予定のプリントは予めバインダーに挟み、生徒に渡す。 ○本時の目標および授業の流れの説明を聞く 【指導上の留意点】 ・前時の5W1Hに関するフィードバックを行う。 ○生徒個人ICT端末で使用するアプリの準備 ・①Google Classroom上の課題、②Google NotebookLM、の2点を開く。 | |

2 展開 1 (14分)～聞き取り～

- A～Dの役割に従い、ICT端末の会話の内容を聞き取り、プリントMEMO欄に記入する(図1、2)。

【指導上の留意点】

- ・「音声を聴く機会は1度である」、
「聞き取り内容をできるだけメモする」旨を生徒に伝達する。



図1 聞き取り(役割D)



図2 聞き取り(役割A)

- 自席に戻り、聞き取り内容をまとめ、グループでの口頭報告の準備する(図3)。



図3 報告の準備

3 展開 2 (12分)～報告～

- 報告内容を記録するため、ICT端末のカメラアプリを起動する。

- 各グループ1名ずつ順番に、A～Dとして聴き取った内容をメンバー間で口頭報告する。報告者は自身のICT端末のカメラで報告内容を記録する。

【指導上の留意点】

- ・報告内容の記録(動画)が、「展開3」の要となるため、確実に録画(REC)ができているか確認する。

[思考・判断・表現]

- 5W1Hの6項目全てについて、事実を時系列または原因と結果の順にまとめることができているか。

[思考・判断・表現]

- 聞き取り内容から課題となる要点を的確に選ぶことができているか。

[思考・判断・表現]

- 聞き取り内容の事実と推察を区別し、根拠を明確化した報告ができているか。

4 展開 3 (13分)～振り返り～

- Google NotebookLMを起動し、自身の報告内容(動画)より文字起こしを実施する。

- ・Google NotebookLMに撮影した動画ファイルを取り込む。
- ・プロンプトに文字起こしを指示する(音声データを文字列に変換)。

- 文字に起こした報告文が5W1Hに則っているかAIに点検させる。

- ・AIへの指示(プロンプト)文の内容を統一し、出力結果にばらつきが生じないようにする。

- 次の①②をGoogle Classroomにあるドキュメントファイルに貼り付ける。

[主体的に学習に取り組む態度]

- 相互学習やAIフィードバックを生かした振り返りができたか。

- ①文字起こしされた報告文
- ②A Iによる点検結果



図4 ワークシートの配付の様子 (Google Classroom)



図5 プロンプトシートの配付の様子 (Google Classroom)

- 貼り付けた①、②を確認し、振り返りを記入する。
- 記したドキュメントを、クラスルーム経由で提出する(1分)。

5 まとめ

- 本時内容の総括および、次時の予告を聞く。

研究実施校：神奈川県立横須賀南高等学校(全日制)
 実施日：令和7年11月11日(火)
 授業担当者：渡辺 奈津美 教諭

キ AIアプリケーション「Google NotebookLM」について

本研究授業では、ノート整理・情報生成ツール「Google NotebookLM」を使用した。このツールは、ユーザーがアップロードしたPDFやドキュメントなどの資料を基に、AIが内容を分析・要約し、質問に回答する機能を備えている。インターネット上の情報に基づく誤情報(ハルシネーション)を抑えることができる点が特徴であり、独自のデータセットやインターネット情報に依存せず、ユーザーが提供した資料のみをソースとして利用するため、信頼性の高い情報を得ることができる。また、生成結果の根拠として正確な引用を表示し、全ての回答の背景を確認できることから、生成内容の透明性が確保されている。さらに、神奈川県立高等学校のアカウントを利用する場合、アップロードしたデータがヒューマンレビューやAIトレーニングに利用されることがなく、個人情報の保護が可能である。

この特徴を理由に「Google NotebookLM」を授業で使用することとした。授業の際には、AIが正確な引用を表示するために、アップロードする資料の信頼性を事前に確認するとともに、データの誤共有を防ぐために神奈川県立高等学校のアカウントを利用してシステム設定を万全にするよう配慮した。

(2) 「『指導と評価の一体化』の実現に向けた学習評価の充実」のポイント

ア 研究背景

「高等学校学習指導要領(平成30年告示)」が掲げる「学習評価の充実」を受けて、授業改善と学習評価を相互に関連付け、学習の過程を的確に把握し、生徒に還元する評価の設計が求められている。しかし、現場では紙ベースのワークシート等に依拠した評価が中心であり、返却までに時間差が生じやすいなどの運用上の課題がある。その結果、単元間の移行期に学習が分散・断絶することも課題となっている。

また、「主体的・対話的で深い学び」を実現するため、協働学習の一環としてグループ活動が広く導入されている。特に福祉に関する各学科においては、学習指導要領第3章「主として専門学科において開設される各教科」第8節「福祉」第3款「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」において、「原則として福祉科に属する科目に配当する総授業時数の10分の5以上を実験・実習に配当すること」が規定されている。これを受け、ロールプレイングなど演習形式のグループ活動が積極的に取り入れられているが、その活動を評価する方法には依然として多くの困難がある。

田丸(2025)らは、主体的学習において学習プロセスの到達度を評価する形成的評価が必要であるものの、その具体的な方法はまだ確立されていないと指摘している。また、アンケート型の自己評価では形成的評価に繋がりにくいため、学生の貢献度をよりきめ細かく把握する必要性にも言及している。さらに、グループ活動における教員の役割について、活動全体を観察し、停滞や誤った方向への進行を防ぎながら支援することが求められるとし、評価だけに専念するのは適切ではないとしている。

このような背景から、グループ活動には次のような構造的な制約がある。①発言量や目に見える役割に評価が偏り、発言の少ない生徒の貢献が埋没しやすいこと、②一部の生徒の高い貢献が成果物や集団成績に吸収され、個々の努力や学びが十分に区別されないこと、③授業の時間的・空間的な制約により、教員の観察だけでは全員の学習行動を網羅的かつ継続的に把握することが難しいことである。その結果、グループ活動が行われていても、評価の妥当性や信頼性に対する懸念から、成績への反映が見送られることが多く、最終的にはワークシートなどの内容を代替的に評価する傾向がある。これにより、学習の過程が十分に評価に取り込まれず、形成的フィードバックによる生徒の自己調整を促す機能が弱まりや少なくなっている。

2022年11月にChatGPTが登場して以降、生成AIを活用した授業実践に関する研究が急速に進展している。これを受け、文部科学省は「初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン(Ver. 2.0)」を公表し、英会話の相手としての利用や外国人児童への日本語学習の補助、文章の推敲など具体的な活用例を示している。また、生成AIの教育評価への応用の可能性にも関心が高まっている。

城野(2025)は、生成AIが中等・高等教育機関において教育実践の効果をもたらし、教育活動への実装を検討する価値があると指摘している。さらに、小林(2025)らは、生成AIを活用した授業で、児童の記述を読み込ませて良い点や改善点を即時的にフィードバックする方法を提案し、学習と評価を結びつける枠組みとして整理している。このように、生成AIは教育評価を支援する可能性を示唆している。

以上の状況を踏まえ、現代の教育現場においては、学習の過程を丁寧に捉え、生徒が自らの学びを調整できるよう即時的なフィードバックを行う評価のあり方が求められている。特に、協働的な学習場面では、一人ひとりの学びを公平かつ適切に評価する仕組みが必要であり、指導と評価を有機的に結び付ける新たな方法の検討が、教育実践の課題として重要視されている。また、その過程で生成AIを活用することへの期待も高まっている。

イ 研究方法・分析枠組み

(7) 研究の対象と単元

対象は高等学校福祉学科1年とし、教科「福祉」、科目「コミュニケーション技術」の単元より選定した。生成AIによる自動フィードバックは、城野(2025)より言語学習分野において構造、語彙、内容、文章校正、一貫性などに効果を示すと報告されており、本単元でも効果が期待できると仮定した。

(4) 研究方法

本研究では、次の二つの点について検証を行う。

一点目は、報告内容の可視化による評価の可能性である。生徒が模擬的に四人の関係者への聞き取りを行い、その内容をグループメンバーに報告する場面を設定し、報告時の発言を音声データとして収録した。授業時間の制約上、生徒同士のやり取りは対象外とし、報告のセリフのみを文字起こししてテキストデータ化することで可視化を実現した。可視化された報告内容について、5W1Hの構造的な妥当性を検討し、報告の可視化が公平かつ適切な評価に資する可能性を検証した。

二点目は、生成AIによる即時的なフィードバックが生徒の学びに与える影響である。報告内容に対して、AIが5W1Hの観点から即時的にフィードバックを行い、その後、生徒が記述した振り返りコメントを質的に分析することで、自己調整が促されているか、学習の深化が見られるかを検証し

た。授業時間の制約上、報告文の修正作業は行わず、分析対象をAIによるフィードバック後の振り返りコメントに限定した。AIに指示したプロンプトは図6のとおりである。

| | |
|--|--|
| <p>#依頼 あなたは[#役割]です。 [#依頼事項]を[#フォーマット]の形式で、回答してください。 [#ルール]を守って実行してください。</p> <p>#役割 的確なフィードバックが得意な日本の高等学校の福祉科教員</p> <p>#依頼事項 高校1年生が「聞き取った情報を報告する場面」を設定し、生徒が話した報告を文字起こししました。 報告が5W1Hに整理されて、整然と話されているか、文または意味のまとまり単位で5W1Hを検証し、よりよい報告とするため、フィードバックを簡潔にしてください。その際、[#元情報]と比較して、聞き取れているのに、5W1Hが不足している場合は、含めるようフィードバックする報告に、「誰かわからない」「いつのことか不確かである」など5W1Hが不明なことに触れていない場合は、報告に含めた方がよいことをフィードバックする</p> <p>[#フォーマット]</p> <ul style="list-style-type: none"> 出力はWordに貼り付けやすい表形式で、各ブロックを1行として次の列を含めます 列順序：原文(抜粋)/トピック/When/Where/Who/What/Why/How/確度(客観的事実/推察)/フィードバック 5W1Hが不明な場合は「N/A」とせず、「不明」と表示すること。 出力形式 1行目に列名を出力。 セグメンテーション規則 基本は1文=1ブロック。ただし同一トピックが連続する場合は最大3文まで束ねる。 「たぶん」「みたい」「最近」「冬だったかも」など曖昧語は推察タグを付ける。 <p>[#ルール]</p> <ul style="list-style-type: none"> 高校1年生にもわかるように記述すること フィードバックは80文字以内で日本語で簡潔に 報告に、「誰かわからない」「いつのことか不確かである」など5W1Hが不明なことに触れていない場合は、報告に含めた方がよいことをフィードバックする **は使わない <p>[#元情報] #Aさんへの聞き取り</p> <p>聞き取り役： 「こんにちは。Kさんのお宅のことで、地域包括支援センターからお話を伺いに来ました。最近、ご近所でお困りのことはありませんか？」</p> | <p>Aさん： 「ああ、来てくださって本当に助かります！もう、正直どうしたらいいのかわからなくて…。ここ1年くらい、明け方の4時と5時ごろに、Kさんの家のあたりから猫の鳴き声が毎日のように聞こえるんです。特に2か月前と先週は、子猫の声が物置の下からすごく聞こえてきて…。Kさんの庭や物置の周りには、いつも2～3匹の猫がうろうろして、最近は風向きによって玄関前に立つと、尿とか生ゴミみたいな強烈なおいがして、本当に困っています。春ごろから特にひどくなって…。夜8時ごろになると、Kさんの家の塀の上にフード皿みたいな容器が置かれているのを何度も見ました。誰が置いてるのかわからないけど、猫が集まってくるのは間違いないです。先週は車庫前で子猫を車で轢きそうになって、もうヒヤッとしました。それに、この半年くらいKさんご本人の姿をほとんど見ていません。最後に見たのは去年の冬だったと思います。私も日中は仕事に行ってるので、会う機会は少ないんですけど…。近所の人たちとも話して、自治会に苦情を出したんですけど、なかなか解決なくて…。息子さんが単身赴任してるって噂もあるけど、本当のことはわからないし…。とにかく、このままだと猫も増えるし、においもひどくなるし、正直どうにかしてほしいんです。私たちだけじゃどうにもできなくて…。何かできることがあれば、ぜひお願いします！」</p> <p>聞き取り役： 「詳しく教えてくださってありがとうございます。ご近所の皆さんも本当に困っていらっしゃるんですね。ちなみに、Kさんが猫に餌をあげているところを直接見たことはありますか？また、Kさんのお宅にどなたか訪ねてきている様子など、何か気づいたことはありますか？」</p> <p>Aさん： 「うーん、餌をあげているところは直接は見たことがないんです。ただ、塀の上にフード皿みたいなものが置かれているのは何度も見てますし、猫が集まっているのも事実です。誰かが夜中に来ているって噂もありますけど、私は見たことがありません。Kさんの家に人が出入りしている様子も、ここ半年は全然見ていません。本当に、何が起きているのかわからなくて…。でも、このままじゃご近所みんな困ってしまうので、どうかよろしくお願いします。」</p> <p>聞き取り役：「ありがとうございます。いただいたお話をもとに、できることを考えてみます。もし他にも気づいたことがあれば、また教えていただけますか？」</p> <p>Aさん： 「はい、何かあればすぐに言います。とにかく、早く何とかしてもらえると助かります…。」</p> |
|--|--|

図6 共通プロンプト

(ウ) AI活用に関する留意点

城野(2025)は、ChatGPT導入時に「評価の公平性」「ライティング学習と能力育成の阻害」「個人情報保護」の三点に課題があると指摘している。特に、「評価の公平性」については、学習者が作業をAIに丸投げし、生成された文章をそのまま提出する可能性が懸念されている。本研究では、このような課題に対応するため、「ハイテク盗作」を予防する措置を講じた。具体的には、音声データを収録するまではAIを使用せず、その音声データを文字起こしすることで文章作成をAIに依存する事態を防いだ。また、共通のプロンプトを活用し、報告文そのものを生成しないよう設定を工夫するとともに、「記録に残す評価」としてAIによる評価を利用せず、成績への反映を行わない方針を採用した。

個人情報保護の観点では、神奈川県立高等学校アカウントを使用し、アップロードしたデータが運営側のスタッフや第三者に閲覧されず、かつAIの再学習に二次利用されない仕様を備えた「Google NotebookLM」をアプリケーションとして選定した。

(イ) 分析枠組み

本研究では、音声データの文字起こしによって報告内容を可視化し、5W1Hに基づいた報告の構造的妥当性を検討した。また、AIによるフィードバック後に生徒が記述した振り返りコメントを質的データ分析手法であるSCATを用いて分析し、自己調整が促されているか、学習の深化が見られるかを検証した。本研究では報告部分の可視化と即時フィードバックの有効性に焦点を当てており、将来的にはグループ活動全体の可視化を通じて教育効果を高める手法の構築を目指す。

なお、SCAT(Steps for Coding and Theorization)は、大谷(2008)によって開発された質的分析手法である。SCATは「比較的小規模の質的データの分析にも有効」であり、アンケート分析などに広く利用されていることから本研究の分析手法として選択した。分析手順は、生徒の振り返りコメントデータに対し、〈1〉着目すべき語句、〈2〉着目した語句からデータ外の語句への言い換え、

〈3〉当該語句のテキスト外概念、〈4〉テーマ・構成概念という4つのステップでコーディングを行う。このコーディング終了後、〈4〉で記述した内容に基づいて「ストーリーライン」を作成し、その後「理論記述」を試みるという手法である。

ウ 結果と分析

(7) グループ活動の可視化に関する結果と分析

本研究では、グループ活動における個々の報告行動を把握するため、ICT端末を用いた音声収録とAIによる文字起こしを用いて、発話内容をテキストデータ化し、可視化した(表1)。15名のデータを確認した結果、生徒3や7からは正確な報告が得られた一方で、生徒2・4・5・6・11では、誤変換や脱字が多く見られた。授業当日の観察から、声量の小ささやマスク越しの発話、語尾の脱落などがAIの誤変換に影響していると推察される。

誤変換が含まれていても、担当教員が文脈を補完することで生徒の意図を読み取ることは十分可能であり、「理解・整理の状態を把握する」データとしては必要な精度を備えていた。また、文字起こしが不明瞭な場合には音声データを参照することで内容を補えるため、形成的評価の素材として妥当性を有すると判断された。ただし、AIによるテキスト化は機械的処理に基づくため、表記上の誤字や助詞の欠落を評価対象とすることは避けるべきである。

さらに今回の文字起こしでは、生徒の報告に含まれる「事実と推察の混在」や「情報の欠落」が明確に示された。特に生徒6や9の報告では、近隣住民の推測(息子の単身赴任や誰かが来ている可能性など)が事実と同列に扱われており、聴取情報の整理における曖昧さが可視化された。口頭報告のみでは教員がリアルタイムに情報の混在や欠落を認識するのは困難だが、文字起こしされたテキストデータを用いることで「疑問の挿入箇所」や「情報選択の基準」を後から確認できるため、公平性の観点から意義があるといえる。

また、同じ音声を聴き取っていても、生徒3・7のように事実を整理・関連付けて報告する生徒と、生徒5・9のように情報が断片化したまま提示する生徒との差が明らかになった。この可視化によって、生徒の理解度や情報の言語化能力の違いが認識され、適切な評価につながったといえる。

一方、文字起こしには限界も確認された。話し方の癖による誤変換や声量に起因する情報欠損、AI特有の機械的誤差は完全には避けることはできない。データをそのまま「客観記録」とみなすことには慎重さが求められ、評価に活用する際には、「意味内容の把握」「文章構成」「必要な事実の抽出」といった観点を重視することが不可欠である。

技術的な制約として、録画をしたにも関わらず音声録音されていない事例2件が発生した。これはカメラアプリがマイクへのアクセスを許可していなかったことが原因である。授業中に原因を究明することはできなかったが、1名は再録画の時間が取れず、AIによるフィードバックを得ることができなかった。この事例は、ICT機器を活用する授業設計において技術的トラブルへの備えや事前確認の重要性を改めて示すものであった。特に、マイク設定や保存形式、アクセス権限など基本的なシステム設定を、生徒自身が主体的に点検できるよう指導する必要がある。これにより、技術的エラーによる学習機会の損失を防ぐだけでなく、ICT機器の活用に伴う自己管理スキルの育成にもつながると考えられる。

総じて、音声データの文字起こしによる可視化手法は、従来の授業観察では捉えにくかった個々の理解度や情報整理の特徴、誤解や欠落が生じる構造を客観的データとして抽出できた点で、グループ活動における個人学習を評価する有効な手法であることが確認された。

表 1 音声データの A I による文字起こし結果(一部抜粋、原文ママ、誤字に下線(=適正な語句)は筆者)

| 生徒 | 文字起こしデータ |
|----|---|
| 2 | 私は担当地域の委員に聞き取りをしました。3週間前の家に訪問した際、インター越しでは出られないと会えませんでした。よく外で買い物する計算(=Kさん)だが、最近は見かけないと近所の方から相談を受けています。本人は息子と連絡を取っているとっていました。郵便物には市役所や病院からのものが混ざって心配です 本人は支援を拒否しています。 |
| 3 | Kさんはよく高血圧で何度か入院をしている。生活指導をするとう年だからと言っている。脳血管疾患の疑いがあり連絡先の登録はCさんがいる。家族と同居はしていない。抑鬱の可能性あり生活状況の把握はできていないが自分の薬の管理ができていないのは分かった |
| 4 | 半年前から福祉の支援を拒否していることが分かり、Kさんのお家に訪れました。インターホンを鳴らすとすぐに出てくれましたが、すぐにドアを閉め閉められてしまいました。少し部屋の中を覗いてみると新聞がず積み(=山積み)になっていました。ポストの中には力会社(=電力会社)や病院の封筒が大にありました。商店街に行ってみましたが最近Kさんの姿は見えていないようで心配していました。 |
| 5 | えっと、私は K さんの息子の中学時代の友人からお話を伺いました。 え、Kさんの友人は小学校からの付き合いで 20 年ほど前からの知り合いです。当時Kさんのオタ(=お宅)には栗の木とブランコが置いてありましたが、現在ブランコは撤去されています。 え、Kさんのオタ(=お宅)では進路就職の論で、え、家庭なトラブルがあったことが え、現在連絡は取れていませんが、写真と連絡先は持っています。 え、どこ側(=か)で暮らしているのではと言いましたが、詳しいことは分かっていないようです。え、最近、え、知人から聞いた話だと海外で暮らしているとおっしゃいました。 え、詳しいことはよくわからないと言っていました、協力したい気持ちと力になりたいとおっしゃっていました。以上です。ます。 |
| 6 | この1年明(=朝)の5時頃に猫の声が聞こえてくるようになった。風向きによって尿や生ゴミの匂いがしてくる。特に春になると匂いがひどくなる。そのため本当に困っている。この前Kさんの庭でフードを見かけた。しかしKけKさんの姿を見ていない。向かいに住む、住人は日中仕事のため詳細は曖昧。数週間前から息子さんは単心不人(=単身赴任)ということが分かっている。 |
| 7 | 半年前にKさんの家を訪問した際、玄関には新聞紙や郵便物が散乱しており、Kさんは福祉に頼りたくないという強い意志を示しました。三週間前のインターホン越しの会話では、Kさんは拒否の姿勢を示しつつも、声はしっかりしていたと報告されています。また、近隣住民によると、Kさんは他人に迷惑をかけることを嫌う性格であり、最近朝の姿を見かけないとも言われています。現在、Kさんの息子やケアマネージャーと連絡を取りながら、状況の確認が進められています。 |
| 9 | 私は私はKさんの家の迎えに住む住人の人から話を聞きました。その人によるとKさんは半年姿がなく、え、その方が最後に、最後に姿を見たのは去年の冬でした。え、春頃には春頃の夜8時には平のKさんの家の兵(=塀)の上に何らかの容器が置かれてえ。(=猫)が集まっている、え、集まっているところを見てみました。え、明け方の4時5時になるとKさんの家から、え、猫の泣き声、あ、猫が泣いていることが気になり始めました。2ヶ月ほど参り(=前)は猫が23、3匹物置きの下から泣いていることにも気がつきました。え、風向きによって尿や生ゴミの匂いが漂うようになりました。 え、また猫を、あ、車前かの前では猫を引いてしまいそうになったことも、え、ありました。え、猫の数が増えていたり、え、風向きによってやみの匂いが漂うことが近所の方々の、え、苦情になってしまい、え、自治会の人に、え、を入れたそうです。以上です。 |
| 11 | え、5年前高血圧だった コレスを計算(=Kさん)が自己判断し、年だからと拒否が多め。訪問心理(=診療)を断った後担当から聞いた。欲鬱の可能性が高い脳のリスクを心配している。最近病院に来られないので計算(=Kさん)の現状は把握していない。副約(=服薬)カレンダーを使用しているが薬の管理が分でないかと考えられる |
| 12 | Kさんとは小学校からの中で20年前くらいまでは実家で遊んで。で、家庭環境の問題で息子が出ていた。で、息子は仕事するって出ていったからどこかにはいるはずで海外で仕事してると噂もあった。で、Kさん、本人は社会的で元気な母というイメージだったけど、最近はどう見えていない。遠い存在になり、昔の写真や連絡先ならあるけど、もう使っていないと思うと言っていた。 |

(イ) A I による即時フィードバックの結果と効果の分析

A I は、共通プロンプトに基づき、以下の観点で生徒の報告に対して、概ね一貫して指摘することができていた。

- ・ 5W1H の不足(特に「When」「Who」)
- ・ 事実と推察の混在
- ・ 情報の出所(誰から得たか)の明示の欠如
- ・ 情報の確かさの不明瞭さ

A I からのフィードバックに対し、生徒の多くは自身の記録の問題点を具体的に振り返ることができた。例えば、生徒⑦は、A I のフィードバックを受けて、5W1Hの活用の重要性に気付き、欠けている情報があれば質問することの重要性を理解し、学びを深化させている(表2)。この振り返りは、本時の評価規準(表3)に照らして「おおむね満足できる」状況と言え、B評価相当と考えられる。複数観点に触れている点は評価できるが、課題の具体性と改善方針の明確さが不足しているためA評価には至らない。一方、生徒④は、5W1Hの活用や根拠の明確化といった観点について、自身の課題点を具体的に把握し、次回以降の改善に向けた意欲や方針を示しており(表2)、「十分満足できる」状況といえ、A評価相当と判断できる。

これらの結果から、生成A I による即時フィードバックは、学習者に自己の記録を客観的に見直させ、次の行動へとつなげる自己調整を促す効果を持つことが示唆された。また、生徒が指摘を単なる改善要求として受け止めるだけでなく、日常の会話等への応用に結びつけようとする姿勢も見られ、学びを深化させる可能性を持つ手立てとして有効であると考えられる。このことから、生成A I によるフィードバックは、生徒の省察に明確な影響を与えたことが明らかになった。

しかしながら、共通のプロンプトを提示していたにも関わらず、一部のA I からのフィードバックでは、生徒の報告内容に対する直接的なコメントを超えて、支援方針や介入方法など、高度な専門的判断を含む出力が見られた。これらは他の出力とは性質が大きく異なり、次のような要因が考えられる。

- ・ A I へのプロンプトが提示の一部分のみの貼り付け
- ・ A I へのプロンプトが生徒オリジナル
- ・ Google NotebookLM における文脈蓄積の影響(複数ファイル干渉など)

表2 生成AIによるフィードバックと振り返りコメント(文の意味を変えない範囲で改編、下線は筆者)

| | 生成AIによるフィードバック | 振り返りコメント |
|----------------|---|--|
| 生徒⑦ 【B評価の例】 | <p>あなたは聞き取った重要な事実(高血圧、服薬中断、医師の懸念など)をしっかり報告できています。しかし、情報を整理して伝える際には、「いつ、誰が、どのように判断した情報か」という5W1H、特にHow(どのように情報を得たか)確度が不足していました。</p> <p>報告で推察や伝聞が含まれる場合、必ず「医師のメモにはこうあるが、真偽は不明」「服薬カレンダーの写真から推測される」など、情報源と確度を明確にすることで、受け手に誤解を与えず、的確な情報共有が可能になります。これは福祉分野において、対象者の方の状況を正確に把握するために非常に大切なスキルです。</p> | <p>①一度で聞き取り、理解して、相手に伝える事が大変だと改めて実感しました。 聞き取る時思った事は、声の大きさや声のスピードが大切だと思いました 一度しか聞き取れないので(二度聞くのは失礼に値するので)、言葉の受け取り方を聞き手と話し手が同じになるようにしないといけないと感じた。 理解する時思った事は、言葉を整理して相手により伝わるような文章にしないとイケない。 相手に伝える時思った事は、機械に自分の動画を評価してもらった文章が自分が言った内容と異なっていて、機械に伝わらないときと相手にも伝わらないので伝わるように工夫が大事だと思いました。(声の強弱、抑揚、声の大きさ等)</p> <p>②相手にも5W1Hを活用して、相手にも詳しく趣旨が伝わるようにできるように頑張りたい。また、受け取る側も5W1Hを活用して、趣旨を理解しようとする姿勢が大切だと思います。もし、欠けている内容があったら、質問してお互いに状況を整理し合うことも大切だと思います。貴重な体験ありがとうございました。</p> |
| 生徒⑧ 【A評価の例】 | <p>全体として、聞き取った情報に含まれる5W1Hのうち、「What(何が起きているか)」と「Where(場所)」については言及がありますが、「When(いつ)」や「Who(誰が)」が曖昧な部分が多く、報告が整理しきれていません。</p> <p>特に重要な点として、聞き取った情報が「噂」や「推察」に基づいている場合(例: 単身赴任の件)や、「誰がやったか不明」(例: フードを置いた人物)な場合は、その「情報の確度」も含めて報告することが大切です。事実と推察を区別し、不明点は「不明」と報告することで、あなたの報告の信頼性が高まります。</p> | <p>what、where、how、の言及はできましたが、when、whoの部分が整理できておらず、曖昧な報告になってしまいました。誰がいつからそうなったのかという情報は、解決するのに一番大事な情報だと思うので、次の機会があったら、誰がいつどのようにしたか、などをしっかり情報を整理して、相手に伝えられるようにしたいです。</p> <p>きはきは話すことと、区切って話すとうわりやすいということが改めて分かりました。不明なことは不明と書いていことが分かりました。</p> <p>5W1Hは日常生活でも活かせるなと思いました!日頃から意識して、使っていこうと思います。</p> |

表3 主体的に学習に取り組む態度の評価規準

| | |
|------------------------------|---|
| 「十分満足できる」状況(A)と判断した具体例 | フィードバックを振り返りコメントで的確に捉え、5W1H・時系列・事実と推察の区別・根拠の明確化などの観点から、自分の課題点を具体的に把握し、次回以降の改善に向けた意欲や方針を示している。 |
| 「おおむね満足できる」状況(B)評価規準 | フィードバックを振り返りコメントで捉え、いずれかの観点(5W1H・時系列・事実と推察の区別・根拠の明確化)について課題を認識している。 |
| 「努力を要する」状況(C)と判断した生徒への指導の手立て | フィードバックを受け取るだけで終わらず、自分の課題を振り返りコメントで言語化してみるよう促し、改善の方向性を考える力を育てる。 |

(ウ) 生徒の振り返りコメント分析

生徒の振り返りコメントに対して、SCATを用いて質的分析を行った。各テキストに対し、注目語句(1)を抽出し、そこから言い換え(2)、テキスト外の知識(3)、テーマ・構成概念(4)、および(5)疑問・課題を段階的に導出した。これらの(4)に記述された構成概念を基に、ストーリー・ライン(図7)を構築した。表4に生徒1、4、7、8、11の振り返りコメントを分析した結果を示す。通番は全ての生徒の振り返りコメントを意味別に区切り、一覧として整理した際の区分である。

表4 SCATによる生徒振り返りコメントの分析(一部抜粋)

| 生徒 | 通番 | テキスト | <1>テキスト中の注目すべき 語句 | <2>テキスト中の語句の言い かえ | <3>左を説明するようなテク スト外概念 | <4>テーマ・構成概念 |
|----|----|---|---|-------------------------------------|-------------------------------------|----------------------------------|
| 1 | 1 | 聞いて覚えたとことを書くことが凄く難しかった です。まとめることも難しかったです。ちよくち よく5W1Hで足りないところを聞き取れていなか ったし、情報をうまく聞き取れずメモ欄の文章の中 に抜けている部分もありました。メモに書いたこ とを動画で撮っていて自分の声が小さく文章が読 み取れていないところもありました。相手が聞こ えるくらい声を出すのが難しかったです。 | 聞いて覚えたとことを書く ことが凄く難しかった | 情報の再構成が困難、記憶 の保持と再表出の難しさ | ワーキングメモリ、即時記 憶と記録力のギャップ | 再生・再表出スキルの未 成熟 |
| | 2 | まず、ここは大切ってところを聞き取ること、 5W1HのWhen、Where、Who、What、Why、Howをしつ かり書く。動画を撮るとき班のメンバーに聞き取 りやすい声をだす。評価で何が不足しているかし っかり覚え次は良い記録を取れるように頑張ります 。 | まとめることも難しかった | 要点抽出の困難、情報の整 理力の不足 | 要約力、認知的負荷、文章 構造化能力 | 情報の統合スキル |
| | 3 | メンバーに聞き取りやすい 声をだす | 5W1Hで足りないところ | 説明不足、情報の網羅性の 欠如 | ロジカルシンキング、報告 文の基本構成 | 情報の整理と報告技法 |
| | 4 | 次は良い記録を取れるよう に頑張ります | 自分の声が小さく | 発声の課題、伝達力の弱さ | プレゼン力、非言語コミュ ニケーション | 伝える力(表出の工夫) |
| | 5 | | 相手が聞こえるくらい声を出 すのが難しかった | 発話の工夫、相手意識の未 熟さ | 対人コミュニケーション技 法 | 相手への配慮、伝える意 識 |
| | 6 | | 5W1HのWhen、Where、Who、 What、Why、Howをしっかりと 書く | 構造的記述、具体性のある 記録 | 報告・連絡・相談(ホウレン ソウ)、記述の型 | フォーマット化による思 考支援 |
| | 7 | | メンバーに聞き取りやすい 声をだす | 配慮のある話し方、協働的 な伝達 | チーム内コミュニケーション 、ピア意識 | 協働学習・グループワー クにおける発話調整 |
| | 8 | | 次は良い記録を取れるよう に頑張ります | 自己調整、成長志向、メタ 認知的姿勢 | 学習の自己制御理論、フィ ードバックループ | フィードバックによる学 びの深化 |
| 4 | 17 | 書きながら聞くというのがすごく難しくて、大変 でした。病気とかの、症状を書くことは出来たが 、なぜその症状が出るのか、原因や、疑いなど を書き出すことが出来なかった。 | 書きながら聞くというのが すごく難しくて | 同時処理の困難さ、マルチ タスクの負荷 | ワーキングメモリ、情報処 理速度、ノートテイキング スキル | 聞き取りと記述の同時遂 行における認知的負荷 スキル |
| | 18 | 自分なりのまとめ方と、クラスみんなのまとめ 方に違いがあった。お互いの良さや、逆に欠点も あったりした。 | 自分なりのまとめ方と、ク ラスみんなのまとめ方に 違いがあった。お互いの良 さや、逆に欠点もあったり した | 表現の多様性、他者比較に よる気付き、個別スタイル の違い | ピアラーニング、観点の違 い、情報の構造化の個人差 | 他者視点によるメタ認知 と学び合い |
| | 19 | 今後は、分かりやすくまとめるために、文字だけ ではなく、まるで困ったり、矢印で話を繋げたり と、工夫をして、後でまた、自分でも読み返せる ようにしたり、他の人が読んでも理解できるように する。 | 他の人が読んでも理解でき る | 客観的記述、第三者への配 慮、可読性の向上 | 対人援助における記録の役 割、伝わる表現技法 | 読み手意識・記録の公共 性 |
| 7 | 25 | what、where、how、の言及はできましたが、 when、whoの部分が整理できていなく、曖昧な報告 になってしまいました。誰がいつからそうなった のかという情報は、解決するのに一番大事な情報 だと思うので、次の機会があったら、誰がいつ どのようにしたか、などをしっかりと情報を整理し て、相手に伝えられるようにしたいです。 | when、whoの部分が整理でき ていなく | 時系列・主体情報の混乱、 話の構造的な不明瞭さ | ロジカルな情報整理、報告 の精度、5W1Hの相互関係 | 記録における時間・人物 の重要性 |
| | 26 | はきはき話すことと、区切 って話すとうわたりやすい | 誰がいつからそうなった のかという情報は、解決する のに一番大事 | 事実確認に必須な情報、問 題把握の鍵 | 福祉記録における「事実の 特定」、アセスメントカ | 支援的判断に必要な情報 の特定と収集 |
| | 27 | はきはき話すことと、区切 って話すとうわたりやすい | 不明なことは不明と言っ ていいことが分かりました | 明瞭な話し方、構造的な表 現 | プレゼンテーションスキル 、非言語・準言語の影響 | 伝わる話し方・聞き手配 慮の表現技術 |
| | 28 | 5W1Hは日常生活でも生かせる なと思いました！日頃 から意識して、使っていこうと思います。 | 5W1Hは日常生活でも生か せる | 応用可能性の発見、生活場 面への転移 | 汎用スキル、生活的文脈に おけるリテラシー | 学校外への学びの転移・ 実践 |
| | 29 | | 日頃から意識して、使っ ていこうと思います | 継続的実践の意志、習慣化 への意欲 | 自己調整学習、行動化、メ タ認知 | 学習から実践への展開、 習慣形成 |
| | 30 | | | | | |
| 8 | 31 | 最初は、記録とかあんまり意味ないかと思ってた けど、やってみたら最初に気付いたことは、俺 はその言葉、会話を聞いていたけどそれ以外の 人は聞いてないので、1ミリもわからずスタート するので、記録は大事だと思った。あとは今 はメモを取ったけど、仕事になったらいちいち メモを取れないから、記憶力も大事だし、記録は ミスれないから大変だなと、思った。 | 記録とかあんまり意味ない かと思ってた | 記録の必要性に対する無理 解・軽視 | 学習の初期段階の認識ギャ ップ、経験を通じた気付き | 認識の変化・学習態度の 変容 |
| | 32 | 俺は書くのが遅かったからどんどん進んじや って、単語だけのメモになっちゃったからあと からまとめる文を書いたら何言ってたか忘れて しまっ苦勞した。ここらへんが僕の苦勞した ところ です。 | 記録は大事 | 共有情報の欠如、記録の意 義に気付くきっかけ | チーム内の情報伝達、共通 理解の担保 | 記録の社会性・情報共有 の重要性 |
| | 33 | | 記憶力も大事 | 情報保持の手段、責任ある 伝達 | ドキュメンテーション、福 祉における記録義務 | 記録の本質的価値・実務 との関連性 |
| | 34 | | 記録はミスれないから大変 | 情報保持の個人能力、記録 に頼れない場面への対応 | ワーキングメモリ、即時記 憶、実務対応力 | 記録と記憶の補完関係 |
| | 35 | | 記録はミスれないから大変 | 記録の正確性へのプレッ シャー | 責任ある記述、倫理的配 慮、第三者への影響 | 正確性と負荷の両立 |
| | 36 | | 単語だけのメモになっちゃ ったからあとからまとめる 文を書いたら何言ってたか 忘れてしまっ | メモの不十分さによる情報 喪失/記憶との断絶 | 記録の簡略化と意味の欠 落、メモ術の限界 | 情報の再構成・記憶補助 の失敗 |
| 11 | 46 | 今回はメモが許されてたけど、本場はメモ無し で一回だけで聞き取らなければならぬので すごく大変と感じた。メモがあっ て難しかった。音声から難しい言葉、わか らない言葉、漢字が流れてくるとフリーズ してしまっ大切な言葉を逃してしま った。 | メモがあっ て難しかった | 書きながらの聞き取りが困 難/記録が認知負荷に | メモと聴取のマルチタ スク、認知的過負荷 | 同時処理における情報の 取りこぼし |
| | 47 | 本来は頭の中で文を作り、記録をする。もう少 し私は文の作り方と5w1hを練習する 必要があるなと思 いました。 | 音声から難しい言葉、わか らない言葉、漢字が流れて くるとフリーズしてしまっ 大切な言葉を逃してしま った | 聴取困難・処理停止/重要 情報の聞き漏らし | 聴覚情報処理、未知語処 理、ストレス反応 | 認知負荷による情報の損 失とストラテジー不足 |
| | 48 | Whoを誰にすればいいのか、Why、How、Whatに 当てはまるメモがない&3つとも同じ意味に 感じ混乱してしまいました。結局5w1hど うりにまとめることが出来な かったです。 | グループに迷惑をかけてし まった | 情報共有の失敗/他者への 影響 | チームワーク、報告の責 任、対人配慮 | 記録の社会性と協働責任 |
| | 49 | 大切なメモ(情報)を聞き逃さないの がいい記録作りに繋がると思 いました。逃してしまっグループ に迷惑をかけてしまっし、医療現場 だったら医療ミスに繋がってしまう ので、難しい言葉、漢字が出て 来たらフリーズではなくて逆に 大切な情報のことを意識したら 苦勞な記録ももっと上手くな っていくのかなと思 いました。 | もう少し私は文の作り方と 5w1hを練習する必要がある | 記述力と構成力の未熟さへ の自覚 | ライティングスキル、情報 構造理解 | 情報整理と文構造化の基 礎力 |
| | 50 | | Whoを誰にすればいいのか、 Why、How、Whatに当てはま るメモがない&3つとも同 じ意味に感じ混乱した | 5W1Hの区別・役割の混同、 分類不能感 | 構造的理解の不足、分類 スキルの未定着 | 情報整理スキルの認知的 課題 |
| 51 | | 大切なメモ(情報)を聞き逃 さないのいい記録作りに 繋がると思 いました | 情報の重要度への気付き/ 記録の質の向上 | 本質情報の把握力、選別 スキル、注意の向け方 | 正確な記録のための注 意焦点化 | |

図7 ストーリー・ライン

多くの生徒が「聞く・覚える・まとめて書く」という一連の情報処理過程において、高い認知負荷を感じていることが明らかになった。特に、話し手の声の大きさやスピード、聞き取りが一度きりという条件の中で、「情報の抜け落ち」「記録と記憶の不一致」「頭の中がごちゃごちゃになる」などの困難が生じ、聴取と記録を同時に行う二重課題の難しさが浮き彫りとなった。

このような体験に加え、生成AIによる即時的な文字起こしとフィードバックを受けたことで、生徒たちは新たな学びを得ている。AIに正確に伝わらなかったという体験を通じて、生徒は「伝わる表現の重要性」「5W1Hによる構造化の必要性」に気付き、「機械に伝わらないなら、人にも伝わらないかもしれない」というメタ的な認識が芽生えた。また、記録中の先入観によって事実とは異なる内容を記述していたことへの気付きや、話し手が5W1Hを意識して話していないことを前提に、「聞き手側で情報を整理し直す必要がある」という構造的視点を獲得する生徒も見られた。さらに、「5W1Hを日常会話でも意識してみたい」「相手が聞き取りやすいように工夫したい」といった言動からは、能動的傾聴態度の形成や、自己調整的学習への移行の兆しが見られる。

これらの結果から、演習型の活動は生徒にとって認知的に負荷の高い挑戦であるが、生成AIによる即時フィードバックを介させることにより、表現の精度を可視化し、記録や伝達における構造的な理解や態度変容を促進する契機となっている。とりわけ、5W1Hという枠組みは、生徒の記録の精度を高めるだけでなく、情報の受け手・伝え手としての両視点を育てる教育的資源としても有効であるといえる。

エ 考察

(7) グループ活動の可視化について

本研究のグループ活動の可視化は、活動中の生徒の発話を記録し、その内容を後から客観的に確認できる点に特徴がある。従来の授業観察では捉えにくかった「生徒がどのように報告を構成しているか」「聞き取った内容をどのようにまとめているか」といった発話内容をテキストデータ化することで報告の構成等の学習活動を具体的に把握することが可能になった。この可視化は、近年重視されている「学習過程そのものを評価する取組」や「形成的評価の充実」に資するものであり、グループ活動における学習の様子を発言量や役割に依存せず、公平かつ適切に評価する視点を提供する手法となった。

音声データの収録に関しては、ICT環境が分析精度に影響することも確認された。生徒のChromebook端末を用いるだけでも十分に記録可能である一方、音量が小さい場面やマスク越しの発話等では音声がこもりやすくなる点が課題として示された。今後は、ピンマイクの活用、発声方法の改善、資料を見ながら話す姿勢の調整など、收音環境の改善を授業設計の一部として検討する必要がある。

(4) AIによる即時フィードバックの可能性

a AIによるフィードバックの気付きを通じた認識の転換

AIによるフィードバックは、生徒に「自分の記録が他者にどう伝わるか」を考える契機となった。特に、生徒の推察ではあるが、「AIに伝わらない＝人にも伝わらない」という経験をお通じて、記録が単なる作業ではなく、他者に向けた伝達行為であるという認識へと転換する生徒が複数見られた。この気付きは、記録内容を吟味し直すメタ認知的な調整行動につながり、情報の精度向上だけでなく、伝達行為への意識を高めるきっかけとなった。

b 5W1Hを活用した情報整理と省察の深化

AIが一貫して使用した「5W1H」の観点による指摘は、生徒の情報整理の枠組みを再認識させるだけでなく、不足している要素への気付きを促していた。特に、「When」「Who」が抜けやすいことや、「Why」「How」の整理が不十分である点に気付き、次回の記録改善に生かそうとする姿勢が多くの子に確認された。このように、5W1Hは単なる知識事項としてではなく、情報を取捨選択・構造化するための実践的なツールとして機能していた。結果として、生徒は記録を「話をただ書き留める」ものから「伝わるように整理する」ものへと転換していた。

c フィードバックの効果と課題

生成AIによる即時フィードバックは、形成的フィードバックとして一定の効果をもたらしていた。多くの生徒がAIの指摘内容を基に、自身の課題を明確に言語化し、改善方針を立てることができていた。特に、事実と推察の区別、情報源の明示、不明点の取り扱いなどの項目に関する気付きが促されており、これにより、生徒の内省は単なる感想に留まらず、学習方針の調整や自己調整意欲の向上へとつながっていた。

一方で、AIによる出力には一定のばらつきが見られ、記録内容とは乖離した高度な専門的判断や支援方針を含むフィードバックが含まれる場合があった。これらは、生徒に適切に意味付けることができないケースもあり、場合によっては混乱を招くリスクがある。原因としては、プロンプトの構造やツール側(Google NotebookLM)の文脈解釈の誤差が考えられ、安定した再現性の確保が今

後の課題である。

d 教育的意義と留意点

生成AIによる即時フィードバックは、生徒にとって記録内容を客観的に振り返り、情報を伝える行為の本質を見直す契機となり得る。その教育的意義は、知識や技術の学習支援だけでなく、生徒の主体的学習を促し、自己調整へつなげる点にある。一方で、生成AI特有の出力のばらつきや誤判断のリスクを考慮し、教師による調整的支援やプロンプトの構造設計の重要性が示唆された。

(ウ) 授業改善としてのPDCAサイクル

SCAT分析により、「聞き取り・記録(メモ)」という情報処理課題は、音声情報の即時的処理と再構成が求められる複合的な認知活動であり、初学者にとって高い認知的負荷を伴う演習となったことが明らかになった。生徒の振り返りには、聞き取れない、書ききれない、話の要点を見失うなどの困難が多く見られ、課題設計が生徒の能力を十分に考慮したものではなかったことが示唆された。

この結果を踏まえ、次回の授業設計では、生徒が段階的に技術を獲得できるよう、情報処理の要素を分解して提示する工夫が求められる。具体例として、「聞くこと」そのものを目的としたヒアリング練習の導入や、5W1Hに焦点をあてた情報整理の演習を別途設けることが挙げられる。これにより、記録という複合課題に必要な技術を段階的に積み上げる授業を設計することが可能となるだろう。

オ 研究協議の内容と今後の課題

(ア) ICT活用授業の再現性について

本時は、ICT機器及び生成AIを活用した革新的な授業実践であったが、その再現性という観点から3点の課題が浮かび上がった。

1点目は、ICT機器及び生成AIの使用にあたっての授業者の負担である。本授業では、技術的トラブルや生徒の操作支援に対応する場面が多く発生し、その対応を研究協力メンバーが補助する必要があった。一人の授業者だけでこうした対応を担うことは非常に困難であるため、ICT機器や生成AIを利用した授業では、チームティーチング体制の導入が望ましいとの指摘がなされた。

2点目は、振り返りのための時間が十分に確保できないことである。授業時間内に生徒が振り返りを十分に行う時間を確保することが難しく、不慣れた操作や情報処理に時間を要する初学者では内省が中途半端で終わるケースが見られた。このため、2コマ連続での授業構成や、振り返りに十分な時間を設計段階で確保することが必要である。時間的余裕を持たせることで、内省を深める環境が整えられ、学びの質向上につながるだろう。

3点目は、技術の習得が学習の目的化してしまう恐れである。ICT機器や生成AIの導入に伴い、アプリの起動、録画設定、フィードバックの表示など操作が複雑化し、学習の焦点がICT操作に偏る課題が見られた。ICT機器や生成AIの使用はあくまで学習支援の手段であり、それ自体が授業の目的化しないよう、明確な学習目標を提示し、技術を中心にしない授業設計が求められる。

(イ) 指導事項について

a プロンプト設計と情報設計の課題

授業構想の段階で、教師が意図する動作をAIに実行させるためのプロンプト設計には多くの時間を要した。本時では、5W1Hに基づいた情報整理を評価観点とし、生徒がリアリティのある会話調の音声からメモを取り、その情報を基に報告文を作成する流れを想定していた。しかし、元情報である会話文には5W1Hの要素が明示されていない箇所が含まれていたため、生徒がどれだけ注意深く聞き取っても再現できない情報が存在する結果となった。その欠落情報をAIが指摘する形で、評価観点と情報設計のミスマッチが発生した。

初期段階のプロンプト作成では、「5W1Hに則っているかを検証して」という単純な指示を与えたが、前述の齟齬を解決するには至らなかった。そこで先行研究を参考にし、AIに特定の役割を付与する形でのプロンプト設計(例:「あなたは〇〇の視点で評価してください」)を採用し、さらにプロンプト内に元情報を組み込んだ結果、期待に沿う出力が得られるようになった。これにより、AIによる生徒の記録内容の評価が文脈に即し、指摘の妥当性が向上したことが確認された。

b 報告形式の限界と非言語的要素への配慮

本実践では、グループ活動の中で個人による記録・報告形式を採用したが、研究協議の間では、この形式の限界について次の指摘がなされた。コミュニケーションには非言語的要素や情動的なやり取りが含まれるため、「報告(活字)」だけを福祉実践における評価対象とすることは不十分である。特に、生徒同士が手の表情や声色、間の取り方を読み取り、文脈から心情を推察することも重要な学びの一環であるとされ、AIによるテキストベースの評価だけでは捉えきれない学習の側面に配慮する必要性が示された。

c 5W1Hの実践的活用と課題

授業時間内に振り返りの時間を十分に確保することができなかった一方で、生徒④から「5W1Hは日常生活でも活かせると思った。日頃から意識して、使っていきたい」という記述(表4)が見

られた。このような気付きは、本来授業内で共有し、全員が日常生活での活用につなげるよう方向付ける必要があった。5W1Hを意識することで、福祉科生徒が身近な他者理解や出来事の整理に適用する経験を積むことは、将来対人援助を担う専門職としての技能形成の基盤となる。専門的な文脈での活用を前提とする前に、日常生活でのコミュニケーション実践に目を向けさせるよう指導を行うことが重要である。

(ウ) 生徒について

ICT機器の操作や録画手順に不慣れな生徒に対して、グループ内で自然に声をかけ合い、操作方法を教え合う姿が見られた。このようなやり取りからは、単に課題を遂行するだけでなく、仲間を支援しながら共に学び合おうとする姿勢が育まれていることがうかがえた。

本実践では、AIによるフィードバックという個別作業が中心となる場面もあったが、その前提となる情報収集の過程では、生徒同士が共通の目標に向かい協力し合う姿勢が見られた。この協力の姿勢は、福祉現場で必要とされるチームワークや、利用者・関係者との円滑なコミュニケーションスキルの育成につながる基盤となると考えられる。

引用文献

- 文部科学省 2024 「初等中等教育段階における 生成AI の利活用に関するガイドライン(Ver. 2.0)」
https://www.mext.go.jp/content/20241226-mxt_shuukyo02-000030823_001.pdf (2025年6月3日取得)
- 大谷尚(2008)「4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」(『名古屋大学大学院教育発達科学研究紀要(教育科学)』第54巻第2), pp. 27-44.
- 大谷尚(2011)「SCAT: Steps for Coding and Theorization: 明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法」(『感性工学: 日本感性工学会論文誌』第10巻第3号), pp. 155-160.
- 小林靖隆・渡辺理文 2025 「生成AI の活用による即時的フィードバックの実践」(日本理科教育学会『理科教育学研究』65巻3号), pp. 573-583
- 城野博志「ChatGPTによるフィードバックがEFL環境下における学習者のライティングスキルに与える影響」(『名古屋学院大学論集人文・自然科学篇』第62巻第1号), pp. 9-22
- 田丸恵理子・宮田真宏 2025 「グループワーク貢献度の学生の自己認識に関する検討」(武蔵野大学『Musashino University Smart Intelligence Center 紀要』第6号)pp. 58-70

参考文献

- 文部科学省 2019 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説福祉編』海文堂出版
- 文部科学省 2021 「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料高等学校専門教科福祉編」
https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r030820_hig_fukushi.pdf (2025年6月3日取得)
- 文部科学省 2025 「<教育利用>③〈国語〉小説の『その後』を創作、生成AI に、想像力と実現可能性という観点で評価してもらおう。」(令和6年度リーディングDXスクール事業【AIパイロット校】新潟県立国際情報高等学校)
<https://leadingdxschool.mext.go.jp/wp/wp-content/uploads/2025/06/D115222600035.pdf> (2025年7月10日取得)
- 伊東哲 2025 「指導と評価の一体化について」令和7年度横須賀市主催研修講座, 教育課題研修講座3資料, 2025.7.30, 於ヴェルクよこすか
- 藤井萌恵・飯田都楓 他 2023 「オンラインツールを用いたグループワークにおける個人貢献度の評価方法の検討」『人工知能学会全国大会(第37回)論文集』, 2023.6.6-9, 於熊本城ホール
- 椋本哲也 2025 「ぺた語義: 教育における生成AI 活用～生成AI 研究校の取組みから～」(情報処理学会『情報処理』66巻, 5号), pp. 219-223
- 山口悦司・坂本美紀 他 2025 「科学技術の社会問題に対する小学生の意思決定を支援する生成AI 利用型教育プログラムの開発」(日本科学教育学会『研究会研究報告』39巻5号), pp. 67-70